

バルベール・ドールヴィイの作品における「虚栄心」

——『ダンディズムとジョージ・ブランメルについて』を軸にして——

小 溝 佳代子

はじめに

ダンディとはいかなる人物かという問いに、われわれは相変わらず決定的な答えを見つけることができずにいる。例えば、スタンダールやバルザックは、ダンディをフィクションとして描くことを試み、またボードレーは歴史的枠組みを取り払ってダンディを理想化しようとし、さらにロラン・バルトはダンディの服装を技巧(technique)として論じようとした。様々な方法でダンディを捉えようとしながら、結局のところ、エミリアン・カラシユスの言葉を借りれば、ダンディは近寄るにつれて姿を消すようである¹⁾。これらアプローチに共通するのは、ただ、ダンディという言葉だけなのだ。到達不可能であるという自明性は、18世紀末イギリスでダンディが誕生して約200年かかって導き出された結論ではない。1845年、『ダンディズムとジョージ・ブランメルについて』において、バルベール・ドールヴィイがすでにこのダンディの特徴を明言している。

このエッセーは、これまでダンディズムという枠組みにおける、あるテーマを証明する一例として切り張りされてきた傾向がある。確かに、ダンディズムとは、あらかじめ統一されない見解を内包しているため、必然的に様々な意見を組み合わせることになり、従ってある程度までその特徴を形成することは可能である。しかし一方で、論じる者の主観が顕著に表れるという側面もある。主題に沿ってダンディズムを論じることは、この側面をしばしば見過ごしてしまうことがあるのではないだろうか。ダンディとはいかなる人物か知ることができないのは、個の概念が一般化できないことに呼応するのだ。

『ダンディズムとジョージ・ブランメルについて』において、バルベールは、ジョージ・ブランメルという歴史的人物に依拠しながら、ダンディとはいかなる人物か、またダンディズムとはいかなる処世術かを論じ

た。冒頭にて作者は、虚栄心(vanité)を取り上げる。そしてこの感情をダンディズムの原動力として、内面からの考察を試みた。その一方で、ダンディズムとは一般化できない側面があることを明示した。我々は作者のダンディズムの視点から出発し、特に虚栄心を軸にして、小説における反映を考察したい。

I. 『ダンディズムとジョージ・ブランメルについて』の特徴

バルベールがこのエッセーを書いた19世紀前半、ダンディはどのように解釈されていたのだろうか。スタンダールは『恋愛論』(1822)において、ダンディはネクタイを上手に結ぶことやブローネユの森で優雅に戦うお人好しの類と説明している。また『優雅な生活論』(1830-1835)においてバルザックは、ダンディズムは優雅な生活の邪道であり、うわべだけの流行で、ダンディになるということは、閨房におさまる家具の一つになってしまうこと、お洒落に凝り固まったマネキン人形になることであり、ダンディには知的側面がまったくないと指摘した²⁾。このように、彼らのダンディに対する見解は、言わば「お洒落に夢中になった自惚れ屋、気取った態度をする人³⁾」という一般的な解釈を裏付ける、批判的な見解と言えるだろう。つまりダンディは、恋愛や処世術についての理論を構築するための、取るに足りない対象なのだ。

ではバルベールはダンディをどのように解釈したのだろうか。彼は、ダンディの典型として、ブランメルという歴史的人物に依拠しながら、ダンディズムそのものの理論化を試みた。

このエッセーは虚栄心についての言及からはじまる。虚栄心は「傲慢になる手段、目立ちたいという欲望⁴⁾」であり、一般的な解釈において、価値の低い感情とみなされていた。しかし作者は、虚栄心が社会に有用であるという見解を示す。

そもそも感情の価値とは、社会的重要性によって判

断され、他者の同意を求める虚栄心こそが、社会に有益な感情であるという。そして愛、友情、自尊心は、排他的な好みであるが、虚栄心はあらゆる人や事物を対象とする好みであると考え、その真価をみいだそうとした。このように虚栄心の一般的な解釈とは異なる視点を提示し、さらに社会にとって有益とみなされている感情と虚栄心を比較することで、その主張に信憑性を与えようとしている。

作者はダンディズム論の冒頭において、この感情について言及する理由として、「ダンディズムは虚栄心の結晶である」⁹⁾こと、そしてブランメルが非常に虚栄心が強い人物であったことを挙げている。つまり彼は、虚栄心をダンディズムの原動力としてとらえたのだ。さらに彼は虚栄心が満足した時、表面化する自惚れについても言及した。

バルバーによると、自惚れとは、女性関係、つまり恋愛において表面化した虚栄心ばかりでなく、出生や財産、野心において表面化した虚栄心をも指す。女性を物とみなす人に共通にみられる自惚れとは、普遍的虚栄心のかたち (*la forme de la vanité universelle*) であり、その一方で、非常に特殊な虚栄心、すなわち英国的虚栄心のかたち (*la forme de la vanité anglaise*) がある⁶⁾という。この英国的虚栄心が満足したときに表面化したものを、作者はダンディズムと定義した。

つまりバルバーは、虚栄心を次のように分類したといえる。女性関係における虚栄心を普遍的虚栄心、出生や財産、野心といった女性関係に限らず、社会とかかわりを持つ虚栄心を有用な虚栄心としてとらえ、英国的虚栄心はその一種として、位置付けられたのだ。そして有用な虚栄心とその一種である英国的虚栄心が表面化した場合の違いを、さらにより明確に区別するために、ブランメルとリシュリユー卿を比較する。

リシュリユー卿は、「フランス特有の神経質なのに短気な種族」⁷⁾に属し、一方ブランメルは「海のように冷たいが、アルコールの炎で凍りついた血を再び活気づけることを好む」⁸⁾種族に属しているという、民族的気質の違いを作者はまず指摘する。そしてリシュリユー卿とブランメルの虚栄心は共に有用な虚栄心であり、それが彼らの行動の原動力であったという共通点を示す。そのうえで、彼らの決定的な違いを以下のように記した。

彼らが属する社会が彼らのうちに姿を現し、そしてまたしても、両者の対照を際立たせるのだ。リシュリユー卿にとっては、社会は、気晴らしへの

抗いがたい渴望において、あらゆる抑制を打ち砕くものだった。一方ブランメルにとっては、社会はその抑制を退屈さをもって反芻するものであった。前者にとって社会は放蕩だったのであり、後者にとっては偽善だったのである。こうした二重の性質のうちにこそ、リシュリユー卿の自惚れとブランメルのダンディズムとの間にある違いがとりわけ見いだされるのだ⁹⁾。

リシュリユー卿にとって、社会は欲望を消化させる場であり、ブランメルにとってはそれを内面化させる場であった。このようにバルバーは、二人の社会に対する態度を対比させ、有用な虚栄心とその一種である英国的虚栄心の違いを強調している。そして彼はこれらの見解をふまえて「リシュリユー卿の国ではブランメルは生まれまいだろう」¹⁰⁾とダンディズムをイギリスに帰属するものとして結論づけた。

さて以上のとおり、バルバーはダンディズム論の冒頭で虚栄心を取り上げ、その有用性を見出した。そして普遍的虚栄心や有用な虚栄心が表面化した場合が自惚れになり、有用な虚栄心の一種である英国的虚栄心が表面化した場合、ダンディズムになることを主張した。つまり冒頭で「ダンディズムは虚栄心の結晶である」と述べたその虚栄心とは、英国的虚栄心といえるだろう。

さて、次にわれわれは、ダンディの才能のひとつである皮肉 (*ironie*) についての言及から、このエッセーのもうひとつの特徴を確認しよう。バルバーによると、皮肉によって人は「神秘のように心を奪い、危険のように不安にさせるスフィンクスの雰囲気を手に入れる」¹¹⁾。その皮肉の及ぼす効果について、上記の引用の注を次のように書いている。

「あなたは迷宮の中の宮殿のようですね」と見たいと思いつつ見ることができず、探し求めながら見つめることができない一人の女が手紙に書いた。彼女は自分がまさにダンディズムの原理をここにあらわしたとは考えもしなかっただろう¹²⁾。

ここでバルバーは、「ダンディズムの原理」は、他者による固定された評価から逃れようとする精神の在り方であるという見解を示している。この見解は、虚栄心や皮肉からダンディズムの本質に迫ろうとしても、そういった解釈からダンディズム自体が、常に遠ざかろうとする傾向があることを見抜いていると言え

るのではないだろうか。実際バルベールは、「ダンディズムは定義することとほぼ同じぐらい描写することは難しい」¹³⁾と、ダンディ像を形成することの難しさを明らかにしている。このように理論化しにくいことを認識しながら、理論化しようとするバルベールの態度もまた、このダンディズム論の特徴と言えるだろう。

Ⅱ. ダンディズム論以前に書かれた小説における「虚栄心」

われわれはバルベールのダンディズム論の特徴として、ダンディズムを虚栄心という内面から考察したことを挙げ、その一方でダンディズムに内包された到達不可能性を明示した点を取り上げた。ではそういった特徴は小説においてどのように変化したのか、ダンディズム論以前、またそれ以降に書かれた小説における虚栄心を通して、その変化を読み取りたい。

ダンディズム論以前に書かれた小説において虚栄心は、常に恋愛と関係する感情だったといえる。バルベールは1833年に書いたとされる未完のテキストにおいて「恋愛は野心のように特別なものだが、虚栄心はありふれたもの」¹⁴⁾であると書いている。この虚栄心に対する視点から出発し、ここでは、『オニックスの印章』(1831)、『不可能な愛』(1841)、そして『ハンニバルの指環』(1842)の三つの小説をとりあげ、虚栄心の描写の変化を辿りたい。

処女作『オニックスの印章』において、若きバルベールは未完のテキストで示した恋愛と虚栄心の対比を描いたといえる。語り手は、シェークスピアの『オセロ』を取り上げ、オセロのデスデモーナに対する嫉妬が、愛情による嫉妬であったと主張する。そしてこの嫉妬を正当化するために、語り手はもう一つの嫉妬物語を語る。われわれはこの物語に着目してみよう。

オーギュスト・ドルセーは社交界で評判が高いことを理由に、オルタンス・ド・某夫人へ想いを寄せ、二人は恋人関係になる。しかし、まもなくドルセーが彼女に興味を失い、その関係は解消へと向かう。しばらくしたある日、彼は舞踏会で、元恋人が将校と踊る姿を目にし、嫉妬に燃える。その姿を見た友人たちは彼を侮辱した。そしてその不名誉は嫉妬と結びつき、彼の怒りの矛先はオルタンスへ向けられた。ドルセーは結末で彼女の局部を封印し、物語は終わる。

このようにドルセーの嫉妬は、愛情ではなく所有欲に作用したため、オセロの嫉妬と対立関係をなす。では彼の虚栄心はいかなる虚栄心だろうか。オルタンス

の評判を理由に、彼女と恋人関係になることで自らの世評を高めようとしたという点から判断すれば、彼女自身よりも彼女の世評に関心を抱いている。つまり、彼の虚栄心は「ありふれた」虚栄心とみなすことができる。しかしこの作品には「女性たちはかくも高いところに行く虚栄心を持ち合わせていない」¹⁵⁾という一節があることを見逃してはならない。バルベールは「ありふれた」虚栄心を描きながら、男性と女性の虚栄心に違いがあること、そして男性の虚栄心には、自己を高めるような機能が備わっていることを匂わせている。この暗示は『不可能な愛』で具体的に描かれることになる。

『オニックスの印章』のオルタンスは、主人公の欲望の対象という役割を担う存在であった。しかしこの物語のヒロインであるジェーブール侯爵夫人は、「虚栄心の最も生き生きとした表現」¹⁶⁾であるコケットリーを發揮し、主人公を誘惑する。彼女の虚栄心は「恋愛が存在するならば」¹⁷⁾という条件付きだが、恋愛に奉仕するという。一方、主人公モレブリエ侯爵は、一旦は恋愛の成立のために奮闘するが、最終的には彼女に隷属することを拒否し、ついに彼の虚栄心は「恋愛に傷をつけた」¹⁸⁾。

ジェーブール侯爵夫人の虚栄心は、終始モレブリエ侯爵を恋愛という「特別なもの」の名において支配しようとした。このような虚栄心は、『オニックスの印章』のドルセーの虚栄心と同じ機能であるといえるだろう。一方、モレブリエ侯爵の虚栄心は、ジェーブール侯爵夫人のコケットリーからの自己防衛として、機能したといえよう。すなわちそれは、処女作にて暗示した「かくも高いところに行く」虚栄心であった。

さて彼の虚栄心は、タイトルが示すとおり、結末に誰も愛すことができなくなったが、『ハンニバルの指環』の主人公の虚栄心の働きは、どのように変化したのだろうか。

この物語は「自惚れが強く、自分のことを優雅だと思っている」¹⁹⁾ダルシ夫人の誘惑に、主人公アロワが、どのように抵抗したかが語られる。彼はダルシ夫人を愛したが、その感情よりも理性に従う。「自分の心に誓ったことを守るために神経を十分に制する」²⁰⁾ことができるアロワは、「彼女の虚栄心を自尊心によって砕く」²¹⁾ことを決意した。その決意は、ダルシ夫人がやもめのボートアン・ダルチネル氏と結婚したことで実現される。なぜなら彼女の行為は、自らの敗北を認めたも同然だからだ。アロワは結末に、ハンニバルの指環にまつわる毒のエピソードを引用しながら、

話者に次のように話す。

「ハンニバルの指環には、——と彼は続けた——
ひとつ石があり、その石の下に毒薬が一滴入って
いたのです。ハンニバルが自殺したのは毒薬のそ
の一滴です。さて、ハンニバルの指環よりもも
と回りが早い毒がある、石のついていない指環が
あります。なぜなら、目に見えない毒なのです。
ただし、——彼はこの上なく陽気に付け加えた
——この毒は偉大な人物を殺したりはしません、
ほんの取るに足りないものを殺すのです。愛を殺
すのです」²²

愛を殺す「毒」とは、『不可能な愛』のモレプリエ
侯爵の、愛に傷をつけた虚栄心の延長線上に位置す
る。『不可能な愛』、『ハンニバルの指環』は、共に恋
愛という欲望に挑戦した虚栄心の勝利が描かれている
が、前者はそれを悲劇ととらえ、後者はそれを高らかに
歌い上げている。このようにダンディズム論以前に
書かれた小説において、男性の虚栄心は、所有欲へ作
用する「ありふれた」虚栄心から、理性によって恋愛
感情を打ち破ることに作用するという意味で「かくも
高いところに行く」虚栄心へ変化したといえる。そし
て「ありふれた」虚栄心は、男性ではなく女性の虚
栄心として描かれた。そういった位置付けは、女性に
そもそも恋愛感情があるのかどうか疑わしいという見
解を垣間見せることになった。しかし初期小説におけ
る虚栄心は結局のところ、支配・隷属の関係のある恋
愛の範囲においてしか語られない。

ここでダンディズム論にもどって、ダンディにと
つての恋愛と虚栄心は、どのような関係であったか確
認してみよう。

確かにブランメルは虚栄心は沸き立つ血のせいで
前後不覚になったりはしなかった、それどころか
その逆である。虚栄心は自分を傷つけるような、
自分と同等のなんらかの情熱と衝突する目に一度
もあうことはなかった。つまり彼の虚栄心は一国
をたった一人で統治する主のごとく、他のどんな
情熱よりも激しい虚栄心だった。愛すること、そ
れは、この言葉のもっとも蔑んだ意味においては
欲することであり、常に一方が他方に従属するこ
と、一方の欲望の犠牲になることだ²³。

ブランメルは虚栄心は恋愛と衝突する感情ではな

い。それはつまり、彼にとって恋愛は、「特別なもの」
ではないということになる。この見解を通じて、われ
われはひとつの結論に達することができるだろう。バ
ルベールは恋愛の枠組みを離れて、はじめて虚栄心の有
用性を明らかにしたのだ。従ってダンディズム論にお
ける普遍的虚栄心とは、初期小説で作者が描きつづ
けた虚栄心であるといえる。そしてダンディズム論を
通じて虚栄心に有用性を見出し、虚栄心を恋愛よりも
「特別なもの」に位置づけたのだ。

Ⅲ. ダンディズム論以降に書かれた 小説における「虚栄心」

では、ダンディズム論以降に書かれた小説におい
て、虚栄心はどのように変化するのだろうか。結論か
ら言えば、虚栄心についてはほとんど言及されず、物
語自体に変化をもたらす感情ではないといっても過言
ではない。なぜなら虚栄心は、主人公の内面ではな
く、副次的人物の内面として描かれているからだ。

『老いたる情婦』(1849)は、ヴェリーニが元恋人で
あるマリニーとその妻エルマンガルドの幸せな生活を
破壊する悲劇である。この物語において虚栄心は、エ
ルマンガルドの祖母であるフレール侯爵夫人、そして
マリニーの友人であるマライユ伯爵の内面として描か
れた。

フレール侯爵夫人は、ヴェリーニがマリニーの愛人
になったその経緯を、彼に告白させる役割を担う。彼
女は聞き手として「虚栄心と気品による最も正当な野
心を持った魅力的で器用な女性」²⁴と描写される老齡
の女性である。初期小説において、女性の虚栄心は所
有欲と結びついており、そしてダンディズム論におい
て、野心と結びつく虚栄心は、有用な虚栄心であ
った。これらふたつのことを考慮すれば、フレール侯
爵夫人の虚栄心を通じて、女性の虚栄心の描写に変化
があらわれたことをわれわれは確認できるだろう。し
かし彼女の野心と結びついた虚栄心は表出することが
ない。

他方、マライユ伯爵の虚栄心とはいかなる虚栄心だ
ろうか。彼はヴェリーニをめぐって、マリニーのライ
ヴァルであった。しかし彼は、マリニーのことをライ
ヴァルとして認めず、それどころか、自分が相手なら
ば、マリニーは自ら身を引くだろうと考えている。彼
のこの傲慢な態度は、「虚栄心と気品にあまりにも精
通していた」²⁵ためであるという。彼の虚栄心は、
ヴェリーニを通して恋愛と結びついていることから、普

遍的虚栄心といえるだろう。

虚栄心は『老いたる情婦』以降の小説においても、副次的人物に与えられた感情として描かれる。『魔性の女たち』(1874)に収められた「罪の中の幸福」のサヴィニ侯爵夫人の父、スタッサンを取り上げてみよう。彼は50歳を過ぎてできた彼女を溺愛したが、語り手のトルティ博士は、そのことを「なんでも二倍にする虚栄心が父性愛をも二倍にした」といい、老齢にして子宝に恵まれたことを自慢することは滑稽だとあざ笑った²⁶⁾。この物語において虚栄心は、その一般的解釈であった「傲慢になる手段」であり、老人の滑稽さをあらわす内面といえる。また同じ小説に収められた「ある女の復讐」のロベール・ド・トレッシニは『オニックスの印章』のドルセーと同じく「不条理な嫉妬と虎のように獐猛な虚栄心」²⁷⁾、すなわち普遍的虚栄心にさいなまれる。

このように、ダンディズム論以降の小説において、虚栄心は変化せず、もはや物語の展開に作用する主人公の感情ではなくなった。しかしなぜ、バルベールは、ダンディズム論において、虚栄心に有用性を見出しながら、その有用な虚栄心を主人公の内面として描かなかつたのだろうか。初期小説のように、恋愛を主題にした物語においては、結局のところ普遍的虚栄心を描くことになってしまうからだろうか。では恋愛を主題にしない物語には、有用な虚栄心が描かれているはずだ。しかし『騎士デ・テューシュ』(1863)のように、ふくろう党にまつわる歴史物語にも、やはり虚栄心は主人公の内面を特徴づける感情として描かれていない。

ダンディズム論以降の小説において虚栄心が描かれなくなった理由を知る鍵を、われわれは語りする方法にみつけることができる。バルベールの小説において、語り手が聞き手を介して物語を語る方法は、処女作『オニックスの印章』以降、ほとんどの作品にみられる特徴である。だがそれとは違って、ここで問題にする語りは、聞き手が主人公と時間的空間的に共有できる存在として位置づけられていながら、語り手の印象に依拠しなければ、主人公を知ることができないという語りのことを指す。例えば『老いたる情婦』において、マリニーはフレール侯爵夫人に、ヴェリーニがいかなる人物かについて語る。ある日ヴェリーニを自分の目で確かめようとフレール侯爵夫人は、オペラ座に向いて待ち伏せしたが、ついに彼女は現れない。つまりフレール侯爵夫人はマリニーの見解を自分の目で確かめることができないのだ。また『魔性の女たち』の

「罪の中の幸福」においては、トレッシニ博士という医者を通して、「私」にサヴィニ侯爵夫人がいかにしてサヴィニ侯爵夫人になったかが語られる。物語は「私」とトレッシニ博士が植物園を散歩中に、黒豹の檻の中に手を差し出したサヴィニ侯爵夫人の大胆な行為を見たことから始まる。「私」は彼女の姿を目にしたものの、彼女と何らかの関係を持つことはない。この物語の主人公もまた、語り手の印象だけで語られるため、聞き手は主人公の本質に触れることができない。印象で人物を描写する方法は、ダンディズム論において、バルベールがブランメルを描写を試みた方法である。彼はブランメルを事実よりも印象によって論じたことを明らかにしている²⁸⁾。ダンディズム論以降の小説において、虚栄心が主人公の内面として描かれなくなったのは、主人公の本質について語らないことこそがその人物の内面に意味を与えることになるかとバルベールが考えたからではないだろうか。そしてまたこのような本質のみえない主人公を描写したことは、ダンディズム論の反映として捉えることができる。バルベールは小説における主人公を「迷宮の中の宮殿」として描こうとしたのである。

おわりに

小説からバルベールのダンディズムの反映を考察する場合、ダンディズムの一般的解釈を含んだかたちで論じられる傾向があった。例えば、『ハンニバルの指環』の「四角い鼻眼鏡と白い手袋をはめた傍観者」であるアロワ・ド・シナローズを取り上げてみよう。エリザベス・クリードによると、バルベールはアロワに、いわゆるダンディ的な役割をもたせようとしながら、結局のところ、恋愛に悩み苦しむ青年像を描き、アロワは内面を誰にもみせず仮面をかぶり続けることで存在を誇示するようなブランメルではなかったと判断している²⁹⁾。この見解は、バルベールのダンディズム観をあらかじめ完成した概念として、小説にそれを当てはめ、そして一般的なブランメル像と比較していると言わざるを得ない。

ダンディズムは最初に述べたとおり、論じる者の主観が顕著に現われるが、だからといってわれわれは、その主観を通してダンディズムの本質を知ることはできない。逆に言えば、ダンディズムの本質を把握できないために、論じる者がそこに独自の視点を持つことが可能なのだ。そういった意味において、彼の視点が作品においてどのように変化するかを辿ることで、

ダンディズムがなぜ一般化できないか、その理由を垣間見ることができるのではないだろうか。そのひとつの試みとしてわれわれは、まずダンディズム論における虚栄心について考察し、それを軸に小説において虚栄心がどのように描かれたかをみてきた。

虚栄心はダンディズム論以前の小説、そしてダンディズム論において、行動原理を保証する内面であった。ダンディズム論以降の小説において、虚栄心が論じられなくなったのは、行動原理を保証する内面を取り払うことで普遍化できない個別的な人物を創造しようとしたからであると結論づけた。ダンディズムとは本質が見えないからこそ、バルベールの創作活動を支える柱となったと言えるかもしれない。

注

- 1) 参照: Emilien Carassus, *Le Mythe du Dandy*, Armand Colin, 1971.
- 2) バルベールは1853年6月22日の「ル・ペイ」紙にてバルザックの『優雅な生活論』におけるダンディに知的側面がないという見解に関して『人間喜劇』でバルザックが最も知的に描いた人物たちこそがダンディだと明言し、彼のダンディに対する認識と想像力の産物の差異を明らかにしようとした。
- 3) *Supplément au Dictionnaire de l'Académie Française*, 6^e éd., 1835, p. 256.
- 4) *Grand Dictionnaire universel du XIXe siècle*, t. XV, Larousse, 1876, p. 765., (Article «Vanité»).
- 5) Barbey d'Aurevilly, *Du dandysme et de George Brummell*, *Œuvres romanesques complètes* (以下 O. C. と略), éd. Jacques Petit, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», t. II, 1966, p. 670.
- 6) *Ibid.*
- 7) *Ibid.*, p. 671.
- 8) *Ibid.*
- 9) *Ibid.*, p. 672.
- 10) *Ibid.*, p. 671.
- 11) *Ibid.*, p. 694.
- 12) *Ibid.*
- 13) *Ibid.*, p. 673.
- 14) Texte inédit signé J. B. et daté de février 1833, O. C., t. I, p. 1231.
- 15) *Le Cachet d'Onyx*, La société Barbey d'Aurevilly, 1992, p. 37.
- 16) *Grand Dictionnaire universel du XIXe siècle*, t. V, Larousse, 1869, p. 87., (Article «Coquetterie»).
- 17) *L'Amour Impossible*, O. C., t. I, p. 65.
- 18) *Ibid.*
- 19) *La Bague d'Annibal*, O. C., t. I, p. 153.
- 20) *Ibid.*, p. 171.
- 21) *Ibid.*
- 22) *Ibid.*, p. 200.
- 23) *Du dandysme et de George Brummell*, O. C., t. II, p. 686.
- 24) *Une vieille maîtresse*, O. C., t. I, p. 263.
- 25) *Ibid.*, p. 276.
- 26) *Le bonheur dans Le crime*, O. C., t. II, p. 92.
- 27) *La vengeance d'une femme*, O. C., t. II, p. 241.
- 28) *Du dandysme et de George Brummell*, O. C., t. II, p. 700.
- 29) Elizabeth Creed, *le Dandysme de Jules Barbey d'Aurevilly*, Droz, 1938, pp. 106-107.